

10. 自殺について

ある入所者（男性、1945年栗生楽泉園入所）は、調査員の「調査票の質問をそのとおり読みますけども、『園内での自殺の話を見聞きしたことがありますか？』〔回答の選択肢が〕『たびたびあった』『たまにはあった』『見聞きしたことはない』という質問に、つぎのように答えた。

「見聞きしたことがない」ってのは、ウソだね。みんな、園内の狭いところだから、もう。いやあ、教会のひと〔だけ〕でも、わたし、何人もつきあわされてる。4人ぐらい、つきあわされてるんだよなあ。Sさんが亡くなってから、何年だろう、まる3年かな。〔それが最後かどうかは〕よくわかんない。それは教会の話ですから、わたしが言ってるのは。わたしが教会の代表をやるようになって、14、5年なんだよなあ。そのかんの話だからねえ。

《自殺》の問題について、ほんらい調査班として聞いたかったことは、「ハンセン病を発病し、療養所に收容されることで、あなたは自殺したいと思ったことはありませんか？」ということであった。しかし、調査班会議に出席していた全療協の役員の方から、「自殺したいと思ったことがあるか、などというストレートな質問だけは、絶対にしないでほしい。入所者はみんな一度は自殺したいと思ったことがある人たちだ。そんな質問をされたら、ショックを受けて、どうなってしまかわからない」という意見が表明された。そうはいっても、聞くところによると、療養所内での《自殺》については、園にも正確な記録は整備されていないらしい。今回の聞き取り調査をとおして、《自殺》をめぐる何らかの記録を残しておきたい。ということで、「園内での自殺の話を見聞きしたことがありますか？」という質問が用意されたわけである。各療養所で自殺が多くあったことを周知の事実として想定したうえで、《自殺》をめぐる聞き取りの、いわば糸口となる質問として考えられたものである。その意味では、「たびたびあった」「たまにはあった」「見聞きしたことはない」という回答の分布を、集計することには、あまり意味はないと言えよう。——もし意味があるとすれば、園内で多くの「自殺」がありながら「ない」と回答した人たちは、なぜそのように答えたのかを究明するということを、ひとつの主題とする場合であろう。

以下、《自殺》をめぐる、入所者の方々が聞き取り場面で語ってくださった語りの一端を示していきたい。なかには、自分自身が自殺しようと思った体験を語ってくださった方もおられる。

ある入所者（男性、1940年栗生楽泉園入所）は、栗生楽泉園での「自殺」は多かったと語る。

自殺した人はいっぱいいる。首つりが多いやな。終戦後だってあったし、終戦前だって、ずいぶん首つった人いるし。女の人が、ひとり死んで、首つって、またひとり首つって。中庭の、あそこで、男の人がひとり首つって。この不自由舎でも、首つって。物干し竿でも首つって。病棟の、東屋（あずまや）でも首つって。最近だって、まだあった。関東の人でさ、A なんとかっていうんだな。あれが、火葬場の坂のところ行

ってさ、縄ひっかけてさ、あすこで首つった。あれはまだ最近だわ。

もう生きていたくないんだろ。あ、まだあったわ。あすこの、六合村（くにむら）の橋から飛び込んで自殺したな。それから、まだあるわ。〔聖〕バルナバ〔病院〕にいたなにかっていうのも、首つって死んじゃったし。まだある。相当あるわさ。Bも死んだな。

終戦前から昭和40年ごろまで多かったな。最近だってあったもの。10年ぐらい前だってあったな。

前出の入所者（男性、1945年栗生楽泉園に入所）は、「自殺されるぐれえ、泣きたくなくなることはない」と、つぎのように語った。

〔園内での自殺は〕あります。わたしは、いま、キリスト教のね、聖公会の代表なんですよ。〔涙声で〕自殺されるぐれえ、泣きたくなくなる、ないよお。それも、わたしの〔住んでいる舎の〕すぐ、その、いちばん向こうにいた人もね、自殺しちゃったの。Sさんってひと。もう、何人も、自殺。そこにいた人も自殺したし、もう、何人もつきあわされたわ。あれぐれえ、情けないことは、ないねえ。もう、死神に呼ばれてるようなもんだね。もうちょっと、がんばっていてほしかったって、いっつも思うんだけどね。もう、あれは、つらいわあ。あんなにつらいことはないわ。うん。死んじまえば、しょうがないけどもね。

ある入所者（男性、1944年栗生楽泉園入所）は、栗生楽泉園での「自殺」の見聞について、つぎのように語った。

自殺する人は、あったですね。何度か耳にしました。自分がいたら姉さんは結婚できないと。で、悩んで。私より若い人ですけどね。湯川を通り越えて、山のほうへ入ってって。雪に埋もれて死んでいった。で、明るる年の5月ごろに発見されたと。そういうのを聞いたことがありますね。それから、家から息子さんが〔会いに来て〕「お父さんが生きていたら、俺は結婚できないんだよ」と、なんか、そういうことを言われて、結局、青酸カリを飲んで。あの、ここからちょっと離れたところに、神社があるんですよ。そこの社のところで首をつって死んだと。そんな話も聞いたですね。いろいろあったです。

ある入所者（男性、1948年ある療養所に再入所）は、入所していた療養所では自殺が多数見られたと語った。

そうですねえ、〔自殺は〕何件ぐらいでしょうかねえ。ぼくの隣の人も死んだし。1人、2人、3人、4人、5人、6人、7人、8人……、10人はいるでしょうね。もっというでしょうね。だいたい、ほとんど知ってますから。

最近では、5年ぐらい前に1人ありました。それはおそらく、本病を苦にじゃなくて、他の病気を苦にして、でしょうね。その前は、精神的な病気を持っていた人とか、神

経痛の人とか、そういう人たちが亡くなった例がありますね。

ある入所者（男性、1944年多磨全生園に入所）は、自分自身が見た自殺の現場について、つぎのように語った。

自殺、よくありましたね。わたしは、あんまり好きじゃないけれども、わたしの隣の部屋の方は、事件屋みたいな人だから、もう、逸早く駆けつけるから。だから、いろんなケースをね、見てきたままに話してくれたりなんかしたことがあります。わたしが自分の目で見たのはね、こういう、部屋の後ろ側に、欄干がありますよね。あれに、三尺帯でもって、首くくってね、膝を曲げて死んでる人の状態を、駆けつけて見たことがありましたけど。大平〔馨〕先生っていう耳鼻科の先生が真っ先に駆けつけてきて。えらいなあと思ったのはね、先生、来ると同時にね、ここ、鼻が出てるのね。それをね、自分の手のひらでね、こう、ぬぐってね。それで自分のここで、こう、ふいて。それで部屋のなかにいる人にね、「ちょっと切る物、貸してください」って言ってね。そしたら、部屋のなかにいる人がね、包丁を持ってきたんですよ。「これは食べ物であれするやつだから、包丁じゃないものをください」って言ってね。それで鉋かなんかで、その三尺〔帯を〕切って、降ろしたのを見て、あのときには大平先生はいい先生だなんて思いましたね。

さらに、おなじ入所者が、こう語った。

〔自殺が〕ないのは、最近だけだな。最近はないね。6、7年ないかもしれない。おれ、園芸部へ入ったときにね、KYっていう人がいて……。KYって人は、顔はなんともない人。そのかわり手も足も指が全然ない人だった。そういうのは、もう長いこと患ってね、少しずつ少しずつ。あの、看護師にね、「鉋で切ったほうが早い」って、切られたんだとかいって、結局ね、もう、これだけ〔＝指のない状態〕になっちゃうわけですよ。それで、下駄も、前のほう切った、小さい下駄でね。それを紐で足首へくくりつけて。それで、三角梯子へのぼって、足、からげてね、それで、刈り込み鉋も腕へ紐でくくりつけてね。それで三角梯子の上のほうから、檜葉（ひば）やなんかの、高い植込みの木がありますよね、あれを上手に刈り込むんですよ。

あるとき……。風呂って、中央浴場はね、20日にいっぺんくらいしか風呂はないんですよ、燃料がなくて。だって、棺桶さえなくて、棺桶だって木を切って、木挽きがね、板にひいて、それで作るっていうような状態だったし。松の木を切ったりなんかしなければ、汽缶場でもってね、燃すものがない。だけど、御飯や味噌汁は最小限度どうしても必要だってことで。だから、風呂がたつ日は、めったになくって。各作業場にね、自分たちでもって風呂桶を工面して、それで入るんだけど。けど不自由な人たちは、お茶わかすのに、風の吹いた日に松葉をかき集めてきて、あれでお茶わかして飲むっていう、そういう時期でしたのでね。で、園芸部のようなところでもね、そうそう風呂わかして入れるほどの燃料があるわけじゃなくて。Kさんが、みんなを風呂へ入れようと思ったんでしょう、主任の責任感で。で、空き家になって

た樺（かば）舎の庭に、目が見えなくなって、首吊った人があるそうで、その人が梅の木で首吊ったってんですよね。首吊ったっていうとね、分館の職員が根っこから切り倒すわけですよね。それがもうね、10年もたってから、その梅の根っこがあるはずだとKさんは考えて、一人で行って、こんな、すりこぎの手で梅の根っこを掘りあげて。それで、それを細かく刻んで、薪（たきぎ）にして。で、風呂わかして入るっていう算段なんですよね。園芸部の連中、「Kさん、そんな、人の首吊った木はよせよ」「いや、迷信だ。そんなことは迷信だ」って言っていたけれども。それで、みんな嫌がるのでね、風呂沸かして、いつもあとに入るのにね、その日は誰も入らないので自分が、真っ先に入って、風呂のふちへ、下駄はいたまま両足をあげて、「おめえらも入れ、いい湯だ」「縁起が悪いだなんていうのは、そんなものは気持ち次第だ」「そんなの気にするな、迷信だ」って言っていたんですよね。

〔そのKさんが〕 なんかかっていうおばあと一緒になってね、神社の近くに住んでたけどもね。おばあさん弱くなってきてね、「たいへんだぞ、これから」なんて言うてるうちにね、自分で首吊って死んじゃった。旧火葬場のあったところのね、こんな、しなしなするような木にね、首ひっかけて死んだんだよね。だから、人間ってわからないもんだなあっていうふうに思いますね。それでも10何年たつてると思いますね。それでも、ここまできて亡くなる人っていうのは、違う理由ですよね。ほとんど老後が心配ってことじゃないですか。なにを、ほっといたって死ぬものを、ってね、言うんだけど、本人にしてみれば、ばあさんとふたりでこれからどんな人生になるか、大変だ、ってね、思うんじゃないか。ただ、誘われるんだって言いますよね。死に行くときにはね、なんか、お花畑を馬車で行くような気分で、鼻歌まじりで歩いていきますよね。わたしたちは、ほら、さっき、大平先生があれした、ああいう無様（ぶざま）な状態を考えていたけれども、じっさいに自殺する人は、もっと美しい夢をもって行くらしいですね。

ある入所者（男性、1947年邑久光明園入所）は、自分自身、病気になった時点で、自殺を考えたことがあること、また、療養所内で自殺を見聞していることについて、つぎのように語った。

この病気になった時点でやね、なんかこう、おかしい病気になったんやからっていうようななにでねえ、こりゃ早いこと死んだほうがましかなっていうような気持ちはあったけどね。病気になったときに家におったときにやね、迷惑みんなにかからんうちにやね、そういうような気もあったけど、ま、それだけの勇気もなかったっていうことになるか知らんけど。まあ、ここへ来てから、そういうようなことは考えたこともなかったけどね。自殺しようかっていうようなね。

〔邑久光明園では、自殺する人〕 ありましたよ。ぼくらが入ったあくる年かな。岐阜から来た女のかたがね。そこの海にはまってね、自殺された方、おられるよ。首を吊って亡くなられた方も2、3おられますよ。やっぱり、人それぞれねえ、苦労があったんじゃないかなと思うけど。

国立療養所入所者調査（第2部）

ある入所者（男性、1948年栗生楽泉園入所）は、自分が入所した当時、園内での自殺がかなりあったということについて、つぎのように語った。

〔入所したときプロミンは〕まだだった。大風子油は打たなかった。大風子油は、痛くて嫌だから。ほとんど治療というのはしなかったいね。

とにかく、もう、半分は病気の問題になるてえと、ヤケクソもあったようだね。みんな、そうじゃねえんかね。どうせ治らねえ病気なんだとかさ。そういうのを教えられもしてきたし。どんどん悪くなって、さっさと逝っちまえばいいとかさ。そんなような考えなの。それ、みんな、自殺とか何回も考えてるからね。おれが入った当時だって、首つりはずいぶんあったよ。

ある入所者（男性、1949年栗生楽泉園入所）は、医局から盗みの嫌疑をかけられた人が自殺するということがあったと、つぎのように語った。

〔栗生楽泉園での〕自殺は、幾人かありますね。ここの、まあ、管理が悪いんですね、医局の倉庫から、麻薬みたいな薬を盗み出して。それでこんどは、その罪人がたらいまわしてみたいになってね。で、その人は、この裏のほうの森のなかに、お諏訪さんっていう神社があるんですけど。そのなかで首吊っちゃってね。〔その人は〕わたしの隣の部屋の人で、韓国の人なんですよ。その人が、まあ、気が小さいんだろうな。逃げればいいのに、逃げずに、首吊っちゃったんだ。〔麻薬を〕盗ったりなんかした人は、どうしたんだか。逃げた人が2、3人いるからね。だから、だれが盗ったかわかんないんじゃないですか。

ある入所者（男性、1952年長島愛生園入所）は、「友だちが何人も自殺した」と語った。

友だちなんか、何人も自殺したよ。高校〔＝新良田教室〕のときも、1級先輩が自殺したし。何人も友だちなんか自殺したな。探しにいったこともある、海にね。わたしも自治会に出とったことあるから、そのときだったかなあ。まあ、同じ釜の飯、食とるから、だいたい顔は知とるから。「あの人がなくなったよ」言うたらさ。〔そういうときは〕普通に、かわいそうにな、という感覚だなあ。誰もが、ここにおる人は一度は〔自殺を〕考えとるからね。実行するかせんかだけの話であってね。〔意志の〕強い人は実行してね、わしらみたいに弱い人は、実行ようせんけど。

〔わたし自身は〕まあ、強く考えたことはないけどね。楽になれるかなあと思ったことはあるわな。

〔自殺を考えるのは〕やっぱし病気じゃろうね。やっぱし、苦しい、痛かったりなんかするとね。神経痛の痛さなんて、半端じゃないんよ。夜、寝れんからね。夜、寝れんと、また、いろんなこと考えるわけなんよ。一晩中、寝れないと。いいこと考えんもん。

今年も1人、自殺された人おるよ。92〔歳〕とかいった。毎年のようにあるんとかうかね。〔だれかが〕急に亡くなると「どうしたの？」っていうことになるじゃん。

「心筋梗塞で亡くなった」と、「ああ、そうか」というてね。病棟に入っていると、ああ、悪いな、いうのはだんだん伝わってくる。きのう元気におったなっていうのが亡くなると、「なんでやろう？」ということになると聞くから、近しい人が、「自殺したよ」とか言うて。

ある長期入所経験者（男性、1950年星塚敬愛園入所）は、自分自身が自殺しようと思ったことが2度あった、と語った。最初は、自分がハンセン病にかかっていることがわかり、職場からも地域からも追い立てられたときであり、2度目は、自分の息子も発病し、療養所に入所せざるをえなくなったときである。

〔自殺しようと思ったのは〕けっきょく、もう入園しなくちゃならんというときが1回。県庁を辞めなくちゃならなくなつて、辞表を出したですよね。そして、ここに入園しなきゃならない残念さ。これはもう、観念しますわね。そのときにね、ほんと、死に場所を見つけて、さまよったことがあります。それは誰も知りませんよ。家内に言うと家内がもう、騒ぐから。〔私が考えたのは〕子どもがついとったら、家内もどうにもならんだろうから、子どもを殺して自分もなに〔＝自殺〕しようかと思つて。まあ、子どもまでね、なに〔＝道づれに〕するということは、とつてもできなかったから、自分〔ひとり〕、すーっと夜中にね、出ました。だから、死に場所をね、私の故郷は、自然の城なんですよ、そういうところから、飛び降りるあれをみつけようと。そしたら、夜が明けましてね。するとね、正常心に帰っていくんですよ。変なもんですよ。今度は、死ぬのが怖くなつちゃつて、早く〔ここを離れなきゃ〕、ここにいると死んじゃうぞと。正常心に帰ったということですかね。それで死ななかつたことがひとつ。これが第1回めの、死のうかなと思つて、なにしたのですね。

私が死のうと思つた2度目は……。〔息子の〕Yが、敬愛園に入るか入るまいかというときに、死のうと思つた。もう、ほんなこつ、かわいそうでたまんなかつたですよ。あれはね、きれいな子でね、かわいい子で、頓知（とんち）のいい子でね。親にも絶対服従で、もうほんと、恥も外聞もないけれどもね、いい子だったですよ。それが、らい病だからどうしようかつて、一晩、家内が相談に来ましてね。Yと下の妹を連れて来ましたよ。子どもが寝静まってからね、「Yが、ちょっと悪いよ。あんたの病気がうつってるよ」と。「なんでそんなことあるかあ」ついたら、「いや、まちがいないよ。学校で、Yは親父の病気がうつつて、らい病だ、ということで、みんなから石を投げられて、学校に来るなと言つていじめられているそうじゃ。もう学校へ行かんと言つてよ」つて。もうそれこそ自分が病気になつたよりか、きつたつたですね。こんな人生があるものかと思つてですね、自分の病気のときよりもですね、可哀想というよりも、親の責任ですかね。私がうつしたわけですから。ほんとに、申し訳ないと思つてですね、苦しみましたね。たしか、5年生か6年生ぐらいだったですよ。

Yが〔敬愛園に〕入つてきたときに、Yを少年舎のほうに移動させる前にですね、私と同じ部屋でね、親子してなににして〔＝過ごさせて〕もらった。そのとき、もう涙が出て……。自分よりもね、Yがかわいそうでね。そのときもね、部屋でそんなこと〔＝自殺〕をしたらいかんからと思つて、Yを外に連れて出て〔一緒に死のう〕かな

とあって、なにをしたことがありましたね。

2回、ほんとに死のうとあって、自殺を決意した。しかし、[ほんとに死ぬには] なかなか勇気がいらすね。勇気がいるというよりも、狂わないと死ねませんよね。もう死ななくちゃしょうがないなとあって決意するわけですけども、死のうというあれを考えていくと、怖くなっちゃう。怖くなったときが、もう平常心に帰ったということじゃないかと思うんです。それはね、首吊りした連中のあれも、海に入水した人も、魚釣りにいって誤って死んだ人もね、私、もう、10何名の連中を見届けていますけれども、よう死ぬるなあと思って感心するんです。その死んだ連中を私とひきくらべてなにをするんですけれども。他のみんなも、そういう経験をみんな持つてるといいますけれどもね。まあ、私と同じように、死にきれなかったという経験ですね。

みんな、一人ひとりがね、いろんなかたちの苦しみを受けておりますし、とにかく、何人かは[自分から]死んでる。私も[自治会の役員として]、何人か、死亡事故に、引っ張り出されました。死亡したときにですね、立会いに。海に飛び込んで死んだやつもおるし、首をつってあれした場合もあるし。死ぬという意識になったら、簡単に死ぬもんだなと。あれ[=椅子]に座っとな、紐かけて……。こうして座っとなんやから。まだ生きとるんじゃないかと、私がなにしたら[=体に手をかけたら]、もうバタッとかういくから……。

また最近、[自殺する人が] ちょっと多くなってるような気がしたけども。Aさんが死んだと思うと、また次にB子が、あるいはC子が、というふうにな、連続じゃないけれども……。

だから、よく自殺者がでるのは、敬愛園も例外じゃないと思います。もう何名、そういうのがおったか。私が数えてもですね、10人以上ですよ。

ある入所者(男性、1951年大島青松園入所)は、大島青松園でも自殺者が多かったこと、また、自分自身、入所してからの最初の2年間は「自殺」ばかり考えていたと、つぎのように語った。

自治会の役員やってたら、まず、駆り出される、行方不明者がでると。私は、何回も首吊り抱いて下ろしたけれどね。自治会の役員総動員。園の職員も総動員で、山狩りやるわけ。海岸を歩いて探すわけ。1年に5人も自殺したケースもあったね。首吊り、入水自殺。[自殺者が出ない年はないぐらい、という] そういう記憶しかないね。15、6年前まではあったんじゃないかな、ポツポツと。それはね、なぜ死んだかっていうのが、誰も知らないケースがほとんど。家族との関係がおかしくなったのがいちばん多かったように思うけれど。自分の病気を苦にして死んだ人もいるけれど。[自殺の理由は] やっぱり、他人にはわからないことだったね。水面下で、ずいぶん苦しんで、そこへ行き着いたというケースが多かったように思う。私だって、死のうと思った。2年間苦しんだ。どこで、どういう方法で死のうっていうふうに、決めてたものね、終いには。

私は、[療養所に]入ってから、もう、自殺以外に考えられなかったのです。入って2年間というのは。もう、失望してしまって。まず、療養所は出られなかった。本名が

使えない。「解剖承諾書」があった。「納骨堂」を見た。それから、義務づけられて「管理作業」をやった。夢も希望もなくなってしまったわけです。明るい展望って、ひとつもなかったから、もう死のう、と。

そこでね、ある転機が訪れた。講演でつい口滑らしたら、そこへ質問が集まった。「なんで、死線からよみがえったのか？」と。「それは、恋だ」と。こんな自分でもね、愛してくれる女性がいるんだってということに、また、びっくりしたわけ。それがもう、倒れてたやつが起き上がるほどの人生観の変化っていうか。もう死ぬしかなかった、なんの取り得もない人間だっていうふうに、鬱状態じゃなかったんかと思うけどね。熱烈な恋心を告白されて、どうしようかと思っ

「結婚したい」ということまで、看護婦、言いだして。まだ、ぼくは子どもだったと、いま思えば思うけど、両親を呼んで相談したのです。どうしたらいいかって。で、一喝されて、「ばかたれ！」って怒られて。「その人はまだ若いし、将来があるのに、むこうの両親の気持ちを、おれたちとしては、親は、考える。むこうの親の立場に立って。だから、一時的な感情かもしれないし、結婚だけは許さない」。両親に説教されて。しばらくつきあって、泣きながら別れた。だけど、その人のことは、死の淵からよみがえらしてくれた恩人だと、いまでも思ってる。